

2013年度ポケット・ゼミと全学共通科目

ジェンダーや性差についての学生の知識・理解を深めるために、平成25年度も自然科学と人文・社会科学の両面から3つの講義を行います。

ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」は、新入生のみを対象とし、ディスカッションに重点をおいた内容です。

■ ポケットゼミ「ジェンダーと科学」

1	4月16日	伊藤 公雄 (文学研究科)	ポケゼミの目的について、ジェンダー研究の歴史と意義
2	4月23日	奥田 昇 (生態学研究センター)	動物の性差と性淘汰
3	4月30日	//	動物の子育てと雌雄の対立
4	5月7日	速水 洋子 (東南アジア研究所)	ジェンダーと文化人類学
5	5月14日	塩田 浩平 (思修館)	性の決定メカニズムについて
6	5月21日	瀬木 (西田) 恵里 (薬学研究科)	身体の性と脳の性 (1)
7	5月28日	//	身体の性と脳の性 (2) —ディスカッション—
8	6月4日	粟屋 智就 (医学部附属病院)	脳の発達と性差
9	6月11日	田中 雅一 (人文科学研究科)	セクシュアリティと文化人類学
10	6月25日	犬塚 典子 (女性研究者支援センター)	ジェンダーと教育
11	7月2日	//	科学技術政策における男女共同参画
12	7月9日	帯谷 知可 (地域研究統合情報センター)	中央アジアの女性解放運動—その歴史と現在
13	7月16日	近藤 史 (アジア・アフリカ地域研究研究科)	アフリカ女性の生き方から学ぶ
14	7月23日	伊藤 公雄 (文学研究科)	総合討論
15	7月30日	//	まとめ

全学共通科目 (前期) の「性差を科学するⅠ」は、文学研究科 伊藤 公雄教授が、ヴィジュアルイメージ教材を多数用いて、メディア、人権問題、スポーツ、国際化などの社会的課題をジェンダー研究の視点から説明します。

全学共通科目 (後期) の「性差を科学するⅡ」は、遺伝学的・生理学的・生物学的に女性あるいは男性であるという指標であるセックスについて、医学・理学などの分野の最先端の研究に基づいて複数の教員が講義を行います。



■ 全学共通科目「性差を科学するⅠ」

全15回 (4月9日から7月23日) 伊藤 公雄 (文学研究科)

■ 全学共通科目「性差を科学するⅡ」

1	10月1日		オリエンテーション
2	10月8日	森 哲 (理学研究科)	動物の行動—性淘汰と性的二型
3	10月22日	疋田 努 (理学研究科)	爬虫類の性と繁殖
4	10月29日	林 美里 (霊長類研究所)	比較認知科学—チンパンジーとヒトと性差
5	11月5日	川北 篤 (生態学研究センター)	植物における性の多様性と進化
6	11月12日	奥田 昇 (生態学研究センター)	魚類の性転換
7	11月19日	//	魚類における子育てと性役割
8	11月26日	粟屋 智就 (医学部附属病院)	脳の発達と性差
9	12月3日	稲葉 カヨ (生命科学研究科)	免疫反応、免疫疾患から見た性差
10	12月10日	林 晶子 (医学研究科・ 集学的がん診療学・寄附講座)	女性に多い摂食障害について 医学的、医療人類学的視点から
11	12月17日	加藤 寿宏 (医学研究科)	子どもの発達の性差について —自閉症スペクトラム児を通して考える
12	1月7日	小西 郁生 (医学研究科)	子宮頸癌からヒトの性の進化を探る
13	1月14日	菅沼 信彦 (医学研究科)	インターセックスの診断と治療—婦人科医の立場から
14	1月21日	富樫 かおり (医学研究科)	子宮をMR画像でみる
15	1月28日	伊藤 公雄 (文学研究科)	まとめ—性差を科学する

女子高生・車座フォーラム2012



プログラム

- 10:15-10:20 開会の挨拶(女性研究者支援センター長 稲葉カヨ)
 10:20-10:30 京大生の学生生活(学生・図書館担当理事 赤松明彦)
 10:30-10:45 才を見極め、才を伸ばす(社会連携事業 WG 主査 鈴木晶子)
 10:45-11:40 講師・研究分野紹介
 11:40-11:45 グループ討論用質問紙記入
 11:45-13:00 昼休憩
 13:00-14:45 【高校生】グループ討論
 【保護者】キャンパスツアー
 14:45-15:15 全体会場へ移動、全体会場質問紙記入
 15:15-16:20 全体での話し合い
 16:20-16:30 閉会にあたって(教育担当理事 淡路敏之)
 16:30-17:00 アンケート記入・回収
 17:00 解散



講師・グループ

G	氏名	所属	研究分野
1	伊藤 公雄	文学研究科	文化社会学、メディア研究、ジェンダー論、イタリア社会研究
	木津 祐子	文学研究科	中国語言学史・中国語研究史
	帯谷 知可	地域研究統合情報センター	中央アジア地域研究、中央アジア近現代史
2	鈴木 晶子	教育学研究科	教育学・思想史
	増田 史子	法学研究科	国際取引法
	土口 史記	人文科学研究所	中国古代における領域支配の研究
3	平野(野元) 美佐	アジア・アフリカ地域研究研究科	文化人類学、都市人類学
	中橋 節子	人間・環境学研究科	都市史・都市論・建築史
	落合 知帆	地球環境学堂	コミュニティ防災、災害社会学
4	細川 暢子	再生医科学研究所	基礎生物学(分子生物学、細胞生物学、生化学)
	柳川 綾	生存圏研究所	行動コミュニケーションを利用した生体防御機構昆虫病理及び生物的防除
	田浦 晶子	附属病院	内耳再生・平衡障害
5	江藤 浩之	ips 細胞研究所	幹細胞生物学
	松本 久子	附属病院	呼吸器内科学
6	稲葉 カヨ	生命科学研究所	免疫学
	小笹 幸子	附属病院	循環器内科学
	奥野 友紀子	医学研究科	分子生物学、薬理学、ケミカルバイオロジー
7	山岡 洋子	情報学研究科	マルチメディア情報処理
	木梨 友子	原子炉実験所	放射線生物学、放射線管理等
	多幾山 法子	工学研究科	建築保全再生学
8	加藤 博己	ウイルス研究所	分子遺伝学、抗ウイルス自然免疫機構の研究
	吉永 直子	農学研究科	化学生態学分野(昆虫の要素代謝制御機能の解明)
	畑尻 かおり	白根センター	植物と昆虫の相互作用(生態学)
9	常見 俊直	理学研究科	素粒子物理学
	犬塚 典子	女性研究者支援センター	教育学、学生支援

学生スタッフ

G	氏名	所属	G	氏名	所属
1	下原 直緒	文学部	6	坂田 諒一	理学部
2	土橋 泰成	法学部	7	平井 隼太	工学部
3	改森 実奈	法学部	8	香月 和敬	農学部
4	田中 綾祐	理学部	9	尾坂 英樹	工学研究科 修士課程
5	西尾 周朗	医学部		嶋田 岳史	工学部
	山崎 美幸	理学部	SV	本塚 智貴	工学研究科 博士課程

平成24年12月16日(日)、今年度で第7回目の開催となる女子高生・車座フォーラム2012を実施しました。これは女性研究者支援センター・社会連携WGが中心となって企画、実施しているもので、女子高生と保護者に京都大学のこと、研究者のことをもっと知ってもらおうと行っています。



犬塚典子・女性研究者支援センター特任教授による司会進行のもと、はじめに、稲葉カヨ・女性研究者支援センター長より、開会の挨拶がありました。

そして、赤松明彦・学生・図書館担当理事・副学長より、「京大生の学生生活」についてのお話をいただきました。学業面では、1,2年生の間は教養教育が中心ですが、本



「京都大学を知ろう 研究者と語ろう」

学では、少人数制のポケットゼミを開講し、1年生のうちから、専門的な分野や研究の世界に触れる機会も提供しています。また、図書館、保健管理センター、キャリアサポートセンター、障害学習支援室など学生生活を支える仕組みも整備しています。課外活動では、多くのクラブが熱心に活動しており、顕著な成果を修めた学生・クラブには、スポーツ表彰などを行っています。

参加者には、京都大学に入学され、充実した学生生活を送ってくださいとメッセージをいただきました。

続いて、鈴木 晶子・女性研究者支援センター社会連携事業WG主査より「才を見極め、才を伸ばす」の講演がありました。

まず高校生に向けて、「才能と学力は異なるもの」なので、偏差値や成績表で数字として見える学力にとらわれず、自分が得意なもの、やりたいものを見つけ、才能を伸ばして欲しいと話されました。

保護者には、子どもが今何を欲しているのかを感じ、子どもの「才」を「愛」で認めてあげて欲しいと話されました。

最後に「愛は機を得て花開く、才は場を得て花開く」との言葉を紹介され、今日のフォーラムで何かを見つけて帰って欲しいと締めくくられました。

講演に続いて、講師とアシスタントの学生一人ずつの自己紹介を行いました。

昼食後、高校生は、グループ討論会場に移動し、9グループに分かれて、討論を行いました。また、保護者はキャンパスツアーに参加しました。



グループ討論の後には、もう一度全員が集まり、伊藤 公雄・女性研究者支援センター推進室長の司会で、全体会を行いました。まず、アシスタントの学生より各グループの討論内容について発表を行い、講師が高校生からの質問に答える形でまとめを行いました。

最後に淡路 敏之・教育担当理事・副学長による全体討論の総括がありました。高校生からの「京都大学のいいところ、特色を教えてください」という質問に対しては、「志」を大切にすることの方針から、入学時に学部を選択する方式をとっていることをあげられました。また、「留学について」の質問に対しては、留学先の大学で取得した単位を、卒業認定単位に計上する仕組みの整備が必要と考えており、現在検討しているとの回答がありました。また、優秀な学生に対しては、留学費用の一部を支援する制度が、既に実施されていることも報告されました。

そして、京都大学を見て、知って、この大学で学びたいと思うなら、是非とも京都大学に来てほしいとの言葉で閉会しました。(支援室)



手に入れよう 研究室での会話スキル

女性研究者支援センターでは、2009年から「研究室での会話スキルを学ぶ」というタイトルで「自己主張トレーニング講座」を開講しています。毎回少人数のグループでそれぞれが研究室でのコミュニケーションに関して悩んでいる問題を出し合って、解決策を探っています。その際に力になるのが、自己主張の考え方です。自己主張とは「自分の気持ちや考えを率直に、その場に合った適切な方法で表現する」ということです。下記の日程で講座を開講します。

■自己主張トレーニング

入門編 「相談してみよう」 初受講者対象

2013年2月19日(火) 16時00分～17時30分 または
2013年2月28日(木) 10時30分～12時00分

基礎編 「体験してみよう」 過去の自己主張トレーニング受講者対象

2013年3月5日(火) 16時00分～17時30分

参加費：無料

対象者：学部生(3回生以上)、院生、研究員、教員(女性に限る)

定員：各回8名(要申し込み)



センターでは、自己主張トレーニングに参加できない方にも講座のポイントなどを知ってもらうため、Webサイトに「研究室での会話スキル」のページを開設しています。その中から、「自分が先輩や上司などの立場で、後輩や部下に接するには？」の内容をここにお伝えします。

■自分が先輩や上司などの立場で、後輩や部下に接するには？

自己主張トレーニングの参加者で、自分が先輩・上司として後輩・部下にどう接したらいいのかが考えたいという方が増えてきています。女性が研究や仕事を続けていれば、そういったニーズが出てくることは、ごく当然のことと思われます。それにしても女性が上の立場に立って指導したり注意したりすることにとまどうことが多いのはどうしてでしょうか。

ひとつには、モデルとなる女性の数が少ないということがあるかもしれません。先輩や上司の女性がたくさんいれば参考にしやすく、いくつかのパターンから自分に合ったやり方を選ぶこともできるでしょう。ところがモデルが数少なければ、たとえば「先輩はズバズバもの言うタイプだから、みんな黙って言うことを聞いていたけれど、自分はきつい言い方はできないから、どうしたらいいだろう？」などと悩んでしまうこととなります。

もうひとつは、女性が男性より上の立場に立つことへの居心地の悪さがあるのではないのでしょうか。それは男性の中に女性に上に立たれることへの不満がまだあるのかもしれないし、女性にとっても女性の上司から注意されることへの反発もあるように思います。

さらには、最近ではハラスメントに対する意識も高まっている中で、女性がハラッサー(ハラスメントの加害者)として訴えられるケースも出てきています。そこには、「女性だったらきっとやさしく対応してくれるはず」というような固定的なイメージがあって、厳しく注

意されたときに、その期待が裏切られたことによって、男性上司の場合よりも強い反発になってしまう、ということもあるのではないのでしょうか。

それでは、具体的にはどういうふうに接したらいいのでしょうか。

まず基本的な自己主張の手法を活用すればいいのだと思います。「IメッセージとYOUメッセージ」の考え方はここでも有効です。注意をする際に、「あなたは能力がない」というようなYOUメッセージでは、相手の人格を否定する言い方になり、ハラスメントになる可能性があります。たとえ相手に問題があったとしても、相手を追い詰めるような言い方は気をつける必要があります。

ただ、だからといって何の指導も注意もできないというのも問題です。必要な注意をしたために、相手が理不尽に機嫌を悪くしたとしても、それは相手の責任です。言うべきことを自信を持って、率直に言っていけば相手も聞きやすくなります。そして同時に、相手の反応を見ながら必要があればフォローすることができればいいでしょう。

やはり何度も経験を重ねると、だんだんやりやすくなっていきます。自己主張トレーニングで、自分の言い方を客観的にチェックしながら練習をしてみてもいいかもしれません。

周藤由美子(ウィメンズカウンセリング京都)

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075(753)2437
FAX 075(753)2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>